
狐物語

穂垂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐物語

【Nコード】

N5301Z

【作者名】

穂垂

【あらすじ】

狐の葵は人里に潜み、母親と静かな生活を送っていたが、或る時狐社会の大立者、道明寺の呼出しを受け、面倒な仕事を依頼された。名家の娘が人間界で非行を重ね狐全体に危険を及ぼす。その説得をせよというのだ。しかし彼女は妖力と美貌を誇り、なぜか葵を眼の敵にしていた。さらに葵の恋人の挙動もあやしい。二人の出生の秘密とも関し、追い詰められた葵は遂には命までも狙われる。なんとか事態をおさめようと、葵は道明寺や狐の仲間たちと行動を起こす。

妖狐跳梁

狐物語

妖狐跳梁

暗い廊下の先のドアから、細い灯りが洩れてきていた。廊下の暗さよりもその灯りのほうが、葵あおいにこの家の闇の深さを感じさせる。しかし葵にとって闇は別に厭うべきものではない。むしろ愛すべきものであるなら、この闇の主宰者もまた葵にとっては愛すべき者なのだ。ドアを軋ませて葵が部屋を覗き込むと、母親がベッドに横たわったまま、鋭い眼差しで彼女の顔を射た。母の眼の光の強さこそがこの闇のなかで一番圧倒的なものだ、と葵はあらためて感心する。しかしこの母親も、もはやその妖力を自在に発揮することはできない。それどころか、こんな夜にはすでに身体さえ自由に動かすことはできないのだ。

「お母さん、それでは私は出かけるから」

母親は明らかに不機嫌なつぶやきを漏らしたが、けっきょく葵から目を逸らすと、とってつけたように道明寺によく呟いた。勢いには娘の思惑などとうに分かっているのだろうが、今夜はしいて止めるわけにもいかない。

もっとも、母親が葵の行動を実際に規制したことはこれまでもなかった。どうせ入れ代わりに、道明寺から誰かがやってくるのだろうが、葵はベッドに近づいて病人の襟元を直した。されるがままに掛け布団を整えられながら、母親が口元に冷笑を浮かべているのが分かったが、葵は別に気にしないことにした。こういうことはないのだ。そんな時には、必ず非難か皮肉を言い出す。そうしないではいられないのだ。それで口喧嘩めいたものになることもあったが、葵はたいていは母親にあまり逆らわない娘だ。それに葵も家や母親から離れるのが、別に嬉しいわけではないのだ。

特に家にいたいわけでもないが。

布団の脇から少しはみ出している母親の片腕をそっと戻すと、それでも葵はベッドの脇の小椅子に座って、母親の様子が落ち着くまで待った。母は横向きの身体を仰向けに戻すと目を閉じ、しばらくすると、規則正しい寝息が始まったようだ。そうやって初めて、葵は部屋を出て行くことができる。後ろから母の冷笑が聞こえるような気もしたが、音を立てないように、しかし振り向くことなくドアを開けて葵は母の家を出ていく。病身とはいえ、勢^{せい}以^いにはいつでもこの娘が必要というわけではなかった。

家を出ると、風が少し強くなっていった。まわりの家々にはまだ灯りのある時刻だったが、牧原の家は住宅地からいくらか離れたところにあるので、人家の照明も特に煩わしくはない。葵は家並とは反対の方角に歩いた。夜風が人々の生活の気配、車の騒音やガソリンの臭いなどを、高く低く葵の鼻腔に運ぶ。しかしそれとともに、草や土の匂いも強くなったし、少々生臭いとはいえ、紛れもなく水の匂いも混ざり始める。それがだんだん強くなってくる。あたりにいくらか照明でもあれば、葵の歩く速度の異常さはさぞや人目を引いたことだろう。やがて足元に雑草が茂り始め、それがほぼ踝を隠すあたりまで来ると、葵はついと身をかがめ、すばやく足元の何かをつまみあげた。薄茶色の昆虫が葵の指先でもがく。葵はそれをしげしげと眺めた。虫は死に物狂いで羽ばたき、草色の裏羽が葵の鼻先で翻った。その蹴りたてる足に鼻を引っ掻かれそうになって顔をしかめると、少し思案した挙句に葵はそれを投げ捨ててしまった。葵は再び歩きだした。

土手にはすでに、見慣れた姿が葵を待っていた。川向こうには、遠く大都会の高層ビルが綺羅の照明を誇る。

二人は黙って落ち合うと、しばらく遠方のその煌めきを眺めた。

「なんだかんだと言って、人間のすることはたいしたものね」

葵はとりあえずそんな感想を述べた。口調が少しぎくしゃくしている。

「これだけキレイなものを作れるんだもの。それだけで賞賛に値すると思う」

「美しいものなんか、人間が作らなくてもこの世にいくらでもある」

亮一の返事はいつもの通り素っ気なかった。

「あれだけ壊れやすいものに膨大な時間と手間をかけるんだ。あまり利口だとも言えないだろう」

それでも自前で作るのはエライじゃないか、と葵は思うが、別に人間に加勢する義理はないので言葉には出さなかった。

川のほうに一緒に降りるように促すと、亮一は先にたって歩き、あらかじめ決めてあった、人目につかない場所で立ち止まった。

葵はそこまでついてくると、飛びついて行って男の首筋にかじりついた。

「亮一、会いたかった」

男は自分にしがみついている葵をしばらく見下ろしていたが、やおらその後ろ髪をつかむと、あっさりと葵を自分の身体から引き離れた。「気をつけろよ、葵。逆上^{のぼ}せると尻尾が出るぞ」

しっぽのことなんか誰が気にするもんですかと、葵は拗ねて言い返したが、実際、尾てい骨のあたりがうずうずとしていた。

「まわりには誰もいないんだし、今回の用事だってどうせ人間離れた仕事なんですよ」

亮一は彼女の腕を掴んでしっかりと立たせると、聞き耳を立てるようにして一応あたりの様子を窺う。しかし葵の目配りが尋常でないことは分かっているから、それ以上懸念はしめさずに用件にはいなかった。

「道明寺からの呼び出しだ。車で送るから話はそこで直接聞け。当分家に帰れないと、勢以さんには言っているだろうな？ 会長がそこを一番心配している」

憤然とした葵の表情を見ると、亮一は慌ててその口元を指先で止め、近くに止めてある車まで黙って葵を引っ張っていった。

「亮一はいつもそういう言い方をする」

亮一の車に押し込められ、男が運転席に座るのを待って、葵はまくしたてた。いくら人目がないようだとは言え、内輪の話を声高にするのはいかにもまずい。そのくらいは葵にだって分かる。

「私はそもそも北方の狐なのに、まるで道明寺の手下みたいじゃないの。こんなふうに勝手に呼びつけられるなんてうれしくないし、ましてや指図通り働くなんて冗談じゃないわ。別に主従関係があるわけでもないのに。母は、それは本土の女だからかわりはあるらしいけど、私は母とは違うんだから。仕事を受けるかどうかは、話を聞いてからにします。私がここに来たのは、亮一に会いたかったからだけなのに」

亮一はこの剣幕にいささか閉口していたが、亮一たちとは立場が違う、と葵が小さい声でぶつぶつ言っているのを聞くと、運転しながら笑い出した。いったい何がおかしいのだろう。

「それは葵の言い分だから、会長に直接言うんだな」

亮一の言葉に、葵は座席に沈み込んだ。道明寺のような大物に葵ごときは対等に渡り合えない。それに葵は道明寺に好意を持っていたし、勢以の意向はあったにしろ、与えられた仕事はむしろ進んでこなしてきたのだ。そういうことはいやではなかった。しかし、葵の言っているのはそういうことではなかった。

葵は眼を上げて亮一の横顔を盗み見た。亮一は黙って前方を見ていた。亮一の家筋やその育ち方では葵の気持ちには理解できないものかもしれない。それにたとえ理解や共感があっても、自分がそういう風に生きることはいまい。葵は一匹狼ならぬ、一匹狐なのだ。

車はしばらく川沿いを走っていたが、やがてすっかり都会の明かりから遠ざかったあたりで左折し、更に寂しい道に入った。ここら辺に来るともう住宅もまばらになり、昔ながらの農家さんところどころに見え隠れする。道路はとくに舗装されていない。車はやがて古いレンガ塀を廻ると、古風な洋館を擁した鉄製の門の前に止まった。車の音を聞きつけて内から小柄な青年が現れ、葵たちの前で

門を開ける。亮一は葵を自分の身体から引き離してドアを開けると、その若者と二言、三言言葉を交わした。若者は車の中を覗き込んでいくらかはにかんだような表情で葵に挨拶をした。まだ本当に若い狐だ。

「高峰のところの浩だよ」 亮一が簡単に紹介した。

「春からこっちに見習いに来ている。もう勢以さんは知っているはずだ」

勢以さんの娘だよ、と亮一は葵も紹介し、浩はもう一度彼女に頭を下げた。

浩に車をまかせて、二人はそこからエントランスまで歩く。入り口までの擦り切れた踏み石にも、どうかすると長い雑草がはびこる。葵が気配を察して奥の庭木のあたりを覗くと、暗闇のなかで数頭のまなこが光った。立ち止まると獣たちはそろそろと庭の奥から這い出してきた、葵に近づくと、頭を低くして挨拶をする。

「このあたりでも、ここ以外には、この子たちの居場所はもうないのでしょね」

葵は誰にともなくそうつぶやいた。亮一は黙って近くの一匹の頭をなでている。それでもこの狐たちは元気そうで、ひとしきり挨拶がすむとまた静かに奥の闇へと帰っていった。

屋外が少々荒れているのに対し、屋敷の内側はきれいに整えられている。葵の通された部屋は、道明寺の私室と事務所の入り混じったような奇妙な洋間だった。もともとの内装や調度品は古びてはいるものの趣味が良くて、それだけならいかにも居心地が良さそうなのに、ステール棚や、折りたたみの椅子やらがそのあいだに置かれ、せっかく風情を台無しにしている。極めつけはテーブルの上でんと置かれた縮小模型で、白っぽい樹脂でできた街の外観のミニチュアのように見えた。開発プロジェクトをかかえたお役所のようだ。他にも似たような模型がいくつか、透明なプラスチックの箱に入れられ、部屋の隅に積まれてあった。机の上にあるものには端のほうにこの屋敷らしきものがあるので、ここらあたりの地形なの

だろうか。

葵を連れてきたことを短く報告すると、亮一はすぐにも部屋を出て行こうとした。道明寺のわずかな仕草がなければ、そうそうに引き上げたのだろう。葵は道明寺の真正面のソファ―に座る。葵がこれまでこの屋敷に来るときには、だいたいは知り合いの娘という立場だったが、今回は少し雰囲気が違う。この部屋に通されたのも初めてだった。

道明寺がこれまで葵に高圧的だったことは一度もないし、葵の知るかぎり、目下に荒い言葉を使ったことさえなかった。それでも亮一など配下の者ばかりでなく血縁である甥たちでさえ、この老人の一挙手一投足に神経を使っているのは葵にも良く分かっていたし、一見温厚なこの老顔が、時にどういう変貌をとげるのかを敢えて見てみたいとは、葵としてはぜんぜん思わないのだった。

しかし道明寺は上機嫌だった。細い頤に丸い頬という不均衡な道具立ては赤味を帯びて色艶がよく、不気味な愛嬌は相変わらずだ。そして手前に置いてある湯飲み茶碗。道明寺はいつでもどこでもお茶を飲んでいるのだ。

「やあやあ、よく来たね。呼び出してすまなかったが、勢以さんの具合は相変わらずかな？」

「相変わらずといえば、相変わらずです」　　葵は少し用心しながら答える。

「口は前より達者ですけど。あの年ですから、身体はもう仕方ありません。道明寺の小父様によろしくとのことでした」

道明寺は少し淋しそうな顔になった。母はたしかこの老人よりかなり年長だったはずだ。

「小父様が私を呼ぶときは、たいがいロクなことがない、と母は思っているようですけれど」

「それは勢以さんのいじわるだよ」　老人はしんから楽しそうに答えた。まったく狐の親玉とも思えない古狸だ。

「じゃなければ、おめおめ葵を来させるものか。あの人はその気に

なればわしなんか、木の葉ひとつで吹き飛ばせるんだから」

葵は溜息をついて、どうか本題に入ってくださいと頼んだ。道明寺が後ろに控えていた亮一に合図をすると、亮一は綴じた冊子のよなものを、どこからともなく取り出して葵に手渡す。

葵はそれを紐解いて一番最初の厚紙をひらいた。

眉をひそめてそれを眺める。

「いまだき、見合い写真ですか？」

紅い薔薇模様の布張りの椅子に細面の若い女が腰かけている。道具立てや構図がいかにも古風だ。座っている女も、いくらか釣りあがった眼元がやや油断がならないとして、まずは相当な美人といえる。

亮一にどうかと思ってな、と老人がしれっと言って、こわばった葵の表情を尻目にうまそうに茶を飲んだ。

葵のものの問いたげな視線に、亮一は顔をしかめてみせた。

「まあ、その娘はとりあえず見合いどころじゃないわな」 老人は楽しいのだから憂鬱なのか分からぬ表情で娘の写真を取り上げ、一緒に綴じられていた五、六枚の用紙を葵に渡してよこした。釣り書きにしては詳しすぎるどころではない。そのほとんどが犯罪履歴だ。

「これは、みんな本当なんですか？」

「まあ別に、全部に証拠があるというわけでもない。なかなか尻尾を出さん女で、眼につくような痕跡はいまんとこ上手に始末しておる。だがこつちもそれなりに調べがついておるし、そこに載つとるのは、まず間違いのないところじゃろう。何件か洩れておるのがあるくらいじゃ」

葵はあきれ顔でしばらくそれを眺めていたが、やがて

「で、これをわたしにどうしろと？」

「最悪の場合にはこの女を始末するしかないんじゃないだろうが」

「冗談じゃない」

「で、そうならないように、葵に何とかしてもらいたい」

葵は途方に暮れて、すっかりくつろいでいる老人を眺め、それか

ら亮一のほうを見たが、こちらは深刻そうな顔をしている。

「御前、なにも葵を使わなくても――」

「御前じゃないぞ。会長と呼べ」

老人は人差し指で亮一を制すると、お前はもう行ってもいいぞ、と簡単に付け加えた。亮一はおとなしく部屋を出て行ったが、頬に少し赤みがさしている。

「あいつも妙なゲンをかつぐヤツでな」

「亮一さんがゲンなんか、かつぎますか？」

葵は怪訝な顔をしたが、老人はそれ以上説明をする気はないように、あらためて娘の写真をしげしげと見ている。

「不憫といえは不憫なんじゃが、ここまですると、もうどうしようもない。読めば分かるが、おおかたはまあ麻薬関係で、微罪といえは微罪なんだが、問題はその状況だ」

「死人も出ているようですが」

「それはまあ、アクシデントというやつで、ユリは――、これがこいつの通り名だな。この名前が気にいっとるんだ。書き方はその時々で違うようだが」

老人はテーブルの上に、百合、ゆり、由梨、と指で綴った。葵がうなずくと

「これは目白のマンションで起きた。まあ、薬のやりすぎじゃろう。ユリは殺人がしたいわけでもないが、別に助けたいとも思わんのだな。人の命など、はなから気にしておらんのだろう。そこにあと二人ばかり人間もいて、すぐに手を打てば助けられたものを、そこでユリがちよっかいをだした。なんでも一時は起き上がって着替えまでしたと。まあ、一緒にいたもんも怯えておったからな。男のほうがかつと匿名で、救急に電話したのが朝の五時かな。四、五時間はたっておったろう。二人の身元はすぐに割れて、これも素直に申し立てたが、このテの男女のことだから、言ってることを誰も信ぜん。ユリの超能力、とか申し立てたそうじゃからな。これだけならばまあユリも無事だが、しかし、似たようなことが前にもあって、

これからも続いておきてくるとなあ……」

「でも、同じ女がからんでいるとは――」

そうはいかん、と道明寺は大仰に手を振る。誰も結局、事態は正確に把握できないかも知れないが、ユリに限らずその行動には一定のパターンがある。意識して隠しても、その素性はなんとなく分かるものだ。そういうものはごまかそうとしても、なかなかごまかし切れないものだし、ましてやユリは何にも考えていない。

「それがだんだん眼につきだしたんじゃない。もうすでに何人も、妙に思っている人間がおろうよ」

葵もそれはそうだろうと思う。道明寺の心配しているのは、女の不行跡ではない。その乱行が人間に引き起こしている混乱なのだ。

葵の思いを首肯するように、老人は続ける。

「何とかつじつまを合わせたい、と普通だったら頭をめぐらす。そして決して、つじつまは合わない。狐に人間のつじつまは通ぜん。だがそうして理屈が合わんまままでいると、事態がどういうふうに暴走するか分からん」

今は葵も考え込んだ。ユリのこととは不穏当ではあるが、一見重大な結果とは無縁だ。ところどころに散らばって暮らす葵のようなものにも、直接何かの影響があることはまずない。ましてや道明寺は大狐だった。普通ならこれくらいの悪行はハナから無視していいはずだった。しかし、葵は道明寺の懸念を共有していた。ほうっておくところくなことになる。それは理屈を越えた狐の直感だった。

「それで会長は私にユリの行動を止めろと？」

「まあ無理だろうと思っとうる」

道明寺はそこで、そっくり返って腕を組んだが、そんな格好をするとかえって獣めくのが奇妙だった。私も気をつけよう、と葵は思う。

「親もとに帰するのが一番の希望だが、もうそれはほとんど不可能に近いわな。だいたい、あれだけの女がいまさらクニでなにせいって

いうんじゃ。とにかく、これまでのような心得違いは何とかせにゃあ。それさえできれば、まさかに足跡が残っているでなし、わけの分からん事態であっても、時間がたてばチャラにもなるうが」

葵は耳をそばだてた。

「それは誰の希望なんです？」

「これの依頼は親元からきておる」 道明寺は苦虫を噛みつぶしたような表情になった。

「さっきの始末というのも、もともと親の希望なんじゃよ」

道明寺の部屋を出ると、浩が車のキーを片手に近づいてきた。嬉しそうな顔をしている。

「亮一兄さんに頼まれたんですよ。これから葵さんを送っていきま
す」

亮一は奥の部屋から出てきて、鍵をかけているところだった。

そのまま素通りしていきそうなので、腕を取って廊下の端に連れていった。

「亮一は、こういう話だって始めから知っていたの？」

亮一の表情がかすかに曇ったように見えたが、すぐに簡単に首を振った。

「ユリがらみの話だとは思ったが、まさか、葵を直接向かわせるとはな」

「ゲンが悪いってことだったけど」

ゲンというかー、と亮一はちよつと言葉に詰まったが、すぐに

「今回の件は、多分おまえではラチがあかない。まあ、ご：、会長はおまえには無理をいわない。いい加減見極めがついたらさっさと降りてしまうんだな」

悪いことは言わない、と付け加えると、亮一はもう廊下のほうに歩き出した。葵はふと思いついて、その後ろ姿に問いかけてみた。
亮一はあの女を知っているの？

知っているといえ、知っている。

背中を向けたままそう答えると、亮一は肩越しにひらひらと手を振って、振り返りもせずに行ってしまった。

鏡子の家

みゆき通りの何本目かを入って、そこをそのまま左に折れると、年代もののビルに出くわす。こんなところにこんな建物がよく残った、と来るたびに葵は思うが、実はそのたびに場所がいくらか違っていきような気がする。今回だって、道明寺に例の模型であらかじめ説明されてなければ、とうていすぐにはたどりつけなかったろう。

古くて装飾的な建物の、それなりに貫禄のあるエレベータを上って四階に着くと、レザー張りの扉が眼の前にあった。横手に裏口らしきものがあるほか、廊下というほどのスペースもないから、思うにこの階に他のテナントはいないのだろう。凝ったデザインの真鍮のプレートに『鏡子の家』と、どこかで聞いたような標札がかかる。この部屋で鏡子は占いを生業なりわいにして、人間の世間を渡っているのだ。顧客は大方はこの界隈の水商売の女性ではあるが、評判を聞きつけてけっこう事業家やビジネスマンなどもやってくるのだと、いつか本人から聞いたことがある。

それが本当かどうか葵は知らない。

しかし鏡子にその気があるなら、占いで評判をとるくらいは簡単にできるだろう。

出来損ないの爬虫類のような奇妙な形のノッカーを叩いたが、しばらくは何も応答がなかった。もう一回叩こうかと思っていると、やっと扉が細めに開く。赤い髪を髪飾りで抑えた中年の女が葵の姿を認め、今度はドアを大きく開けて、よく来たわね葵ちゃん、と歓声をあげた。

「お久しぶりです。鏡子姉さん」

鏡子は葵の身体を抱きかかえんばかりにして内へ招き入れた。

「道明寺では誰もあんたを送らせなかったの？ そんな荷物まであんたに持たせて」

浩はもちろんこの部屋まで送るつもりだったようだが、葵は強くことわって、私鉄の駅で降りしてもらった。少し人間に慣れたかっ
たし、街の空気にも触れておきたい。葵の生活は、基本的に人とさ
ほどの関わりを持たなくとも済む。ことに最近、母親ができる限
り彼女をそばに置きたがるせいもあって、あまり人間と接触を持っ
ことがなかった。だがユリという女は人界をその活動の場にしてい
るのだから、葵としても勘が鈍ってはまずい。

電車の中や街中で見かける人間たちの生活は、相変わらずのよう
に思えた。

葵は途中で必要な買い物をすませ、ついでに小さなバッグも買っ
てそれにあれやこれやの品物を詰めた。何日か他人様の家で世話に
なるのに、狐といえども多少の身支度はいる。

「鏡子姐さんは、相変わらずですよ」

浩の運転する車の中で道明寺から渡された資料を読んでいると、
浩はそんなふうに言いだした。葵が深刻そうなので、遠慮したのか
あまり話しかけてはこなかったが、そういう年頃なのだろう、車を
運転すること自体が好きなようで、浩は楽しそうだった。

「このあいだ、うちのほうにも来てましたから。もう一人、すごく
キレイな人も一緒だったなあ。会長と三人で部屋に籠もってしま
いましたけど」

何を思ったのか、浩はちょっと顔を赤らめ、慌てたように付け加
えた。

「お茶を持っていったら、三人で話し込んでいたんですよ。なんだ
かすごく深刻そうで」

写真を見せると、この人だったと、浩は認めた。なぜかまた、顔
を赤くしている。

あまりいい教育をしていないようだ。それともすぐに赤くなる気
質^ちなのか。

それはいつ頃の話と聞く葵に、

「うーん、いつだったかなあ。もう二、三ヶ月になるかもしれない」
目白で死者が出たあたりだ。

そうすると、鏡子はもちろん道明寺も、その時点ではすぐにユリと連絡が取れたわけだ。

数時間話し込んだ後でユリはすぐに帰っていったが、なんだか怒っていたようだった。鏡子はしばらく残っていて、浩ともいろいろお喋りをした。鏡子は亮一も捕まえようとしたが、亮一はうまくはぐらかして逃げた。兄さんはあの人が苦手なんですネ、と浩は感想を述べた。

「まあ、分かるような気もするけど」 葵は思わず笑ってしまった。
「でも頼りになるし、とてもいい人なのになあ」

浩は心外そうだったが、自分が口を出すべきことでもないので、黙ってそのまま運転を続けた。

「また、面倒なことになったちゃったわねえ」

鏡子は派手な花柄の長椅子に寝そべるようにして葵の話聞いていたが、やはりそうでも言うしかあるまい。

「雲をつかむような話なんですよ。会長は例によって、あまり詳しい説明はしないですし。とっかかりといえど今のところ、鏡子さんしかないんです」

葵も同じ柄の椅子にくつろぎ、そのなめらかな布張りをなでた。

道明寺のソファーと同じ薔薇の模様だ。ユリもそんな柄の椅子に座っていたから、あの写真があの家のかか、そうでないにしても、いずれ道明寺の息のかかった場所で取られたことは確かだ。この薔薇模様は老人のお気に入り、道明寺のあらゆる家に同じ柄の調度があった。母の勢以がよく笑っていたものだ。母も昔凝った織りの入った同じ柄の着物を贈られていたが、そんなものを着て、いったいどこに行けというのだ。模様の趣味自体が悪いわけではないのだが、その偏愛ぶりは確かに少々奇矯だった。

「私だって、そう詳しくはねえ……。だいたいあの娘はもともと狐

とはあまり親しくつきあわないの。あたしの見たところ、人間のほうが好きみたいだったわ」

そういうこともあるのかもしれない。

鏡子はしばらく眼を宙に浮かしていたが、とりあえず使えるのは文さんだわねえ、と呟く。片手を伸ばして、脇の小さなテーブルに載る受話器をつかんだ。鏡子が電話で段取りをつけているあいだ、葵は自分に用意された部屋に向かった。文さんとやらが来るまでには、少し時間がかかりそうだし、葵も今夜は少し疲れた。さっぱりとシャワーも浴びたいし、できれば少し一人になりたい。幸い鏡子の客室は清潔で居心地がよかったし、葵はゆっくりくつろげそうだった。

最初にユリの悪い噂が出たのは十年以上前の話だ。

「だけど最初はたいしたことはなかった。ちよつとした不良娘のいたずら程度で。それからおとなしくしていた時期もあったし。ほんとにひどくなったのはここ何年かの話だわね。だから、道明寺もあわてでした」

「そのきっかけはあったんですか」

「あったんだろうと思うけど、それは誰も知らないわけよ。ただし親との関係はそれ以前から悪かったらしいわ」

「ユリの親はきびしいですよ」

ここで、文さんが口を出した。文さんは灰色がかったジャンパーに野球帽という、競馬の予想屋のような風体をしている。年は鏡子と同じくらいか。鏡子が自分の占いため、ときどき調査を頼んでいるのだそうだ。鏡子はなかなか商売熱心なのだ。

「最初の万引きだか窃盗だかのときは、それはもうすごい怒りようで。道明寺さんが、わざわざとりなしに入ったくらいでした。まあ、それが発覚する前から実はいろいろあったんらしいんですが。あそこは一応名家でして、悪い仲間と一緒にだったし、コトが名指しでバレちゃったからね」

「でもそれからは大人しかったんでしょ」

「まあ表沙汰にならなかったのか、監視が厳しくなったんだか」

文さんはここでちょっと首をかしげたが、当時のことを思い出そうとしたのかもしれない。

「人間界でのことは、その時考えてませんでしたからね。後から出てきた噂ですが、当時人里のほうでかなり奇妙な心中事件があった。それにもユリは関わったんじゃないかって。ユリそっくりの女がいたのを、最近の事件で誰か思い出した人間がいたようです」

「でも、人間の尺度だったら十何年は長いでしょう。それでもユリだと分かったんですか？」

「だから、かえって変だったんじゃないの」 鏡子がそんなふうに引き取る。

「昔とそっくりな立場の女が、昔とおんなじ顔で出てきて、一見何気なくその場にいらって。実は裏でなにか仕掛けたなんて、その時点では分からなくても」

「その時点でなければ、分かる？」

そこで鏡子は眉をひそめた。まあ、何となく怪しいのよねえ、とつぶやく。

「とにかく、細かいことがいろいろあるから」

「細かいことの内訳ですが」

たとえば、と、ここで文さんがちびた手帳をめくりながら

「やくざ同士の抗争というか、一人銃でやられたのがいまして。すぐに警察が乗り込んできたが、男は腹を撃たれて重傷。そのときはユリは男に呼び出されて、現場のホテルに一緒にいただけ。ベッドで裸で震えてたってんで、誰が見たってとばっちりでしょう。それからしばらくは何もないが、次に絡んだのはコンビ二強盗で、会社を首になった中年男が食うに困って深夜のコンビ二を襲った。そういう男だからべつに荒っぽいことがしたかったわけじゃないが、その場に居合わせたユリの悲鳴で店中がパニック、大混乱になって男は店員に刺し傷を負わせて自転車で逃走。慌てて近くの国道に飛び

出たところで、トラックに当たって即死だ」

葵の顔を見ながら、文さんは続ける。

「後から警察が調べたら、店はユリの住んでた近くで、ユリと男は面識があった。なんでも時々弁当を買ってやったりしてたらしいが、それ以上のことはなんにも出ない。しかしこれはたまたま前の事件と管轄が同じだ。またこの女かと、思わないほうがどうかしている。葉関係でもそんなような曖昧なかかり合いが山ほどあって、長いあいだには相当数のもんが不審に思う。不審というより、不気味だろうな。なんかすわりが悪いっていうか」

「あたし達から見れば、みえみえだけど」と、鏡子。

「人間にこのからくりは分からないわねえ。それでも、やっぱり不気味なわけよ。でもそれは、あくまで事実をつなげられる者にとつてで、ひとつひとつはどうってことない。だからユリは勤めもやめないし、まわりとの関係も温存できるの」

「なんだか、とりとめのない行状ですねえ。こんなことを続けたって、いったい何の得があるのか」

葵は溜息をついたが、実は内心あきれてもいた。この文さんという男を葵は前から知っていたのだ。

葵の記憶するところによれば、本名は確か文彦ふみひこといった。道明寺のところなどで一度ならず会っているから、向こうも葵を知っているはずだ。そのときは、普通に勤め人風のナリをした、地味で温和な狐だった。目立たない男ではあったが、それなりに身についた品もあった。別に今の文さんが下品というわけではないが、なんだか育ちまで違うようだ。文さんは飄々として、雇い主の鏡子のみならず葵に対しても腰が低く、それでいてなかなか頼りになりそうだった。文さんは文さんであることを、とことん楽しんでいるみたいだ。葵の当惑を知ってか知らずか、文さんはここで数枚の写真を並べた。

そのうちの一枚は男の写真だ。歳は文さんによれば、四十二ということだが、それよりずっと若く見える。上瞼のあたりだけがやや

のっぺりとして、それがいくらか狡猾そうに見えるが、全体としてはむしろ爽やかな印象、頭もかなり切れそうだった。しかしなんだかヘンな写真だ。

「この男前は高城たかしろといって、これで代議士さんですよ。ユリの目下のお相手です」

どうりで、写真の愛想が良過ぎる。きつと選挙用のものだろう。

そろそろ夜が明けはじめたので、話は一旦おひらきとなった。文さんに貰った資料も増えて、葵の荷物は重くなったが、ちっとも事態が進展していない。

いったいユリが今どこにいるのかという、肝心なことさえ分からないのだ。急なことなので、と文さんは面目なさそうだったが、もちろんそれは文さんの責任ではない。部屋を用意するという鏡子の勧めを固辞し、文さんは夜明けの街に帰っていった。鏡子の家の窓から見ると、文さんの後姿が明方の光にしらじらとうつる。ふらふらと歩いていくその影が、葵の眼にはとみに薄く思えた。しかしそれは文さんに限らずに、太陽の光のなかでは葵の種族は皆そうなのだろうか。

「道明寺の小父様が、この件をわたしに振ってきたのには、なにか特別な理由わけでもあるんでしょうか？」

ソファアールであくびをしている鏡子に、葵はさっきからわだかまっている疑問を口にした。

鏡子は伸びをした腕をそのままにして、少し考えていたようだが、結局、特にないと思うわよ、と答えた。

「それより葵を呼び出すことで、少しでも勢以さんとながつていたいんじゃないかしらねえ」 鏡子は考え深そうに付け加えた。葵がそばで仕事をしていれば、勢以さんを身近に感じていられるでしょう。

「ただの、口の悪い年寄りなの？」

「それは葵は勢以さんの全盛時代を知らないから」鏡子は笑った。
「それは、たいした女だったわよ。あたしなんかでさえ、そばに出るとうまく口がきけなくなった。なんだか緊張しちゃうのね。自分がすごくトロい小娘に思えて。道明寺なんか、なんでも勢以さんのいいなりだった」

「それが、あんなになっちゃうんですか」

自分の親に言う言葉、と鏡子は苦笑した。

「確かに、葵はあまり勢以さんとは似ていないけどね」

「私は父親似ですから」 葵はつぶやいて、窓の外を眺めた。顔立ち以上に、体質やちよつとした癖とかが父親に似ていた。そういえば父が生きていた頃は、二人そろってよく風邪で寝込んだ。勢以はめったに風邪を引かない。

鏡子が自室に引き上げて、家中の物音が絶えてからも、いろいろな思いが頭のなかで錯綜して、葵はなかなか寝付けなかった。瞼の裏にユリの写真や、亮一の顔が浮ぶ。牧原の暗い部屋の、恨んでいるような怒ったような勢以の眼差し。そして道明寺の赤い薔薇の模様。あの赤い薔薇模様は、青春の女を慕う老人の妄執なのだろうか。生きとし生けるもの、恩愛の軛をのがれることはできない。ましてや狐は情が深い。ベッドの上で何回も寝返りを打ったあげく、ようやく葵は眠りに落ちた。

葵が家を出る頃には、鏡子はもうとつくに、その日の買い物に出ていた。居間に続いた小さな部屋が左側にしつらえてあって、ドアが少し開いていた。鏡子が占いに使っている部屋だ。薄暗い部屋には赤紫の垂れ幕のようなものが張り巡らされ、かすかなアロマの香りが居間にまで流れる。その入り口の近くには、これは採光のためだろう、曇りガラスを市松模様に嵌め込んだ大きな窓が取ってあった。もちろん外は見えないが。ほかの場所でも見かけるものだが、ここのは特別な仕掛けでもあるのか、昨夜はやはり赤紫がかった光がガラスの面を流れているように見えた。今は普通の灰色をしてい

る。

文さんから貰った情報を頼りに、葵はまず、高城のほうからとりかかることにした。ユリが人間界で根城にしたのは、たいていはバーやクラブのたぐいだったが、何箇所か変わったそういう店にも、とうに姿を現していない。だから葵の目下の探索は唯一住所の分かっているところ、高城事務所から始めるしかない。

国会や議員関係の建物の集まったあたりでもはずれの、あまり目立たないビルの一階に、高城の事務所の看板が出ていた。窓にもポスターが貼ってあって、本人の写真のイメージと違いかなり野暮ったい構えだったが、政治家の事務所だから、だいたいこんなものなのだろうか。

葵は髪を後ろでまとめ、顔を撫でて感じを変えると、ノックしてからノブを廻した。奥にも部屋があるようだったが、事務室の中には一人しかいない。高城の選挙用のポスターや、標語や、誰かと握手して笑っている写真などが、やたらに壁に貼ってあって、真ん中の机に陣取っていた中年の男が、眼鏡をずり上げながら訝しそうに葵を見た。葵はぺこりとお辞儀をして高城が最近都内でおこなった環境問題の講演をあげた。たいへん良いお話だったので、あつかましいんですが、先生のことがよく知りたくて、と切り出す。できれば何かお手伝いしたい、とまでは言わなかったが、相手はそういうふうにとった。

「でも、ウチはインターシップもやってないんだよねえ」

男はかなりじつくりと葵の話を聞くと、支持者をむげにできない気持ちもあってか、どうしたものかと、考えている。葵はすかさず即席の名刺を取り出す。

「まだ学生ですので、もちろんあまりお役にはたてないんですけど。でも選挙なんかで人手がいるときには呼んでいただければ。これでも猫の手くらいにはなるのじゃないかと思えます」

どうせ名刺はどこかに放り込まれて、すぐに消えうせてしまう。

男は学生っぽい名刺に記載された大学名を眺めながら、ほう、優

秀なんだねえ、と感心していたが、かなり葵に好意的になっている。葵は適当に話をあわせながら、すばやく室内を物色していた。高城が直接触れていて、まだその跡があるものが多い。

突然、奥のドアが開き、慌てたように男が出てきた。奥にずっといたようだったが、少し服装の乱れたような感じがするのは、ソファで仮眠でもとっていたのか。しかしこれが高城だとは、すぐに分かった。

高城はびっくりしている葵を認めるとすぐに、平常心を取り戻したようだ。事務所の男の説明を簡単に聞くと、愛想のいい笑顔を葵に向けたが、急いでいる気持ちは隠せないでいる。事務所の男の表情がなんとなく苦々しげなのが注意を引いた。

椅子を引こうとした葵の足が何かに引っかかって、葵が思わずよろけそうになった。高城がとっさに紳士的に葵を支え、葵はひどく恐縮した。

慌ただしい言い訳を口にしながら高城が事務所を出ていったから、葵は「先生」の感じの良さを賞賛しながら、少しの間、事務所でのおんぶりお茶をいただく。それからパンフレットを山ほど貰って、広い道路まで出た。

千鳥ヶ淵に近いホテルは、葵が以前来た時とは外観の印象が違う。おそらくその後改装したのだ。よろけた拍子に高城の背広から掠めとった繊維を頼りにタクシーを乗り継ぎ、このホテルにまでたどり着いた。

ロビーを見渡していると、誰かが葵を呼んだような気がした。驚いたことに、文さんが向こう側の椅子から葵を手招きしている。葵は急いでそちらにむかった。

「葵さん、さすがだね」 文さんは手に持った新聞をたたむとエレベーターのほうを眼で示して、指で部屋の番号をなぞった。

「さっき高城があがってったところだ。ユリは少し前から来ている。どうやらここに泊まるつもりらしい。ただ高城は険しい顔だね。そ

ろそろ秋風が立っているのかもしれない」

葵は声を低めるようにして、文さんのほうに顔を寄せた。

「高城はユリの行状を、どの程度知っていると認めますか？」

文さんは、さあてね、とちよつと首をかしげた。

「ほとんど知っちゃいないと思うね。やつこさんだって政治家だ。知っていたら、そんなあぶない女に手は出さないだろうよ。しかしまあ、それがバレてもめてゐるって、こともあるかな」

文さんは野球帽こそ脱いでいるが、灰色のジャンパー姿は相変わらずだ。しかし、背筋が前より伸びているようで、こういう場所でも意外に違和感がない。

葵たちはユリか高城が出てくるまで、かなり待たされる覚悟でいたのだが、高城のほうに案外と早くエレベーターから降りてきた。なるほど険しい表情をしている。高城は振り向きもせずホテルから出て行ったが、葵には、なんとなく男の苦渋が見えたような気がした。

「とにかく、ユリとは一度会ってみて、こちらの意向を伝えるつもりだったんですが」 葵は溜息をついて文さんにささやく。

「むこうの態度を見てみて、それから打つ手を考えようって。だけど、あの様子じゃ今はちよつと無理ですね。きっと機嫌は最悪でしょうから」

文さんと溜息をついていると、今度はユリが姿を現した。

エレベーターを降りるまでは、こちらにも顔は険しかったが、すぐに何事もないような表情に戻り、フロントのところで話をしている。ユリはさすがに、美しかった。着ているものも上品で趣味がよかったが、なによりも、本人の美貌がきわだっていて、色が白くて、眼が大きくて、横顔なんかつんとしている。とても犯罪にかかわるような女に見えない。

「ユリは後回しにして、とりあえず高城にでもあたってみます。今頃は事務所に戻っているかもしれない」

ホテルから出ていくユリを見送りながら、葵も椅子から立ち上が

った。ごくろうさまだねえ、と文さんは同情しているようなおもしろがっているような顔をしている。文さんは、鏡子に頼まれた他の用事があるというので、また夜にでも出直してきますと言いきき、葵もそのホテルから出た。

高城はさすがに疲れているらしく、ラウンジの椅子に深々と腰をおろしている。

葵は再びタクシーを乗り継いで、高城を追ったが、実を言うと、事務所に戻られるのは面倒だと思っていたのだ。しかし結局高城はお堀を半周して官庁関係の会館に入り、そこで開かれた会合に出ていた。それが終わった頃にはあたりはもう薄暗くなっていて、高城はそこで待っていた運転手らしい男と立話をし、どうやら先に帰したらしい。少し一人になりたかったのだろう。

葵は、額に手をあてたままぼうつとテーブルを眺めている男のところに向かった。テーブルにはウイスキーのグラスがひとつ出ている。

高城がこちらに、顔をあげた。目の前の小柄な若者を怪訝そうに見て、二、三度まばたきをした。ええと、君は誰だったかな、と少し迷惑そうなようだ。

葵はぺこりと頭をさげて、かまわずに向かいの椅子に腰を下ろす。高城の警戒心の強まった表情に苦笑しながら適当な名前を名乗ると、先生にちよつとおうかがいしたいんです、と切りだす。

「先生は、ユリさんて人を知ってますよね。以前『トパアズ』にいた人です」

高城の顔から表情が消え、椅子にもたれたまま半眼で青年を見る。「お店の人に聞いたら、ユリさんの居所は先生が知っているはずだっというんです。先生に聞くのが一番だって。僕はユリさんに会って話を聞かなきゃならないんですけど、誰も居場所を知らないんですよ」

「悪いがお役にたてないな。残念ながら、私も知らない」

高城の目配せで、カウンターのあたりで様子をうかがっていた大男が、こちらのほうに歩き出してくる。

「でも、目白のマンションで、人が一人死んでいるんです」

高城は逡巡したようだったが、結局男をいったん引かせた。

「先生はご存知ないかもしれませんが、そういう事件があったんです。新聞にだってのりました。そのマンションにいた女の子は専門学校生で、僕とつきあっていた子なんです」

風俗関係と聞いたが、と高城がつぶやいたが、語るに落ちたというものだろう。

「それは、アルバイトをしていたんです。ほんとにはマジメな学生で、僕たち真剣につきあっていたんです。だから彼女があんなことをするわけがないし、だいたい話が最初からおかしいんです。その場にいたユリさんが、なんにも言われないで帰されたっていうのも――」

ちよっと待ってくれ、と高城は本当にあわてた。ユリ：さんがそこにいたっていうのは？

「そう言っている人がいました。それなのに警察はなにもしないんだって。だから僕が自分でいって、ユリさんに知ってることを全部話してもらえば、彼女の名誉だってはれるかもしれない」

それは、不名誉だろう、とは高城は言わなかった。それどころではないのだろう。高城の表情から気怠さが消えて、頭が回転しはじめている。

わたしは、本当に彼女の居場所を知らない、と高城は改めて若者に言って聞かせた。わたしがあの店で彼女と親しかったのは本当だが、そこまで親密だったわけではないし、プライベートはほとんど知らない。その、君のガールフレンドの事件だって、誰かにいろいろ吹き込まれたらしいが、そういうことがもしあるなら、警察が黙っているわけがない。それはちゃんと調べてくれるよ。

「でも高城先生は、あのー、ユリさんのパトロンだって……。だから警察も遠慮していて――」

そんなことがあったら大変だ、と高城は笑い飛ばす。日本は法治

国家なんだよ。だいいちパトロンだなんて根も葉もない。

「彼女はあれだけの美人だし、あの店でも僕よりずっと親密だった男が何人もいたよ」

君も余計な詮索はせずに、彼女が帰ったら優しく迎えてあげることだね。まだ若いんだからこれからいくらでもやり直せる。二人でまっとうに暮らすことだ。

時計に眼をやって高城が椅子から立ち上がった。若者が口を尖らせて、思いきれないそぶりですぐつぶやく。

「でもあのユリさんて人は、ほかにもいろいろな犯罪の噂があるって……、それも先生は知ってるんですか？」

高城は一瞬動きが止まったようだが、それでも振り向かなかったし、それ以上別れの言葉もかけなかった。

高城が立ち去ってから、葵はそこに悄然とすわっていたが、やがて好奇の眼で葵を見ていたカウンターの男の注意がそれると、のろのろと椅子から立ち上がった。

ロビーのほうをふと見ると、自分とそっくりな若者があわててソファアの陰に隠れた。葵は回れ右をして非常口に向かい、人影のない廊下の隅で急いで元の姿に戻った。ロビーのソファアを素通りしてさっさと建物を後にして歩く。三回ほど信号をまわったところで待っていると、さっそく浩が駆け寄ってきた。

「ああびつくりした。葵さん、僕の姿を使っただんですか？」

ごめん、と葵は平あやまりだ。

「女じゃないほうが、と思ったけど、他に思いつかなかったの。まさかあなたが、ここにいるなんて考えてなくて。本当にごめん。なにか不都合が起きちゃうかしら？」

「不都合というほどのことはありませんが」　　なんだか浩はほっとしていた。

「ただ僕はまだ化けるのが下手ですから、亮一兄さんの頼みが果たせなくなりました」

「亮一がどうして、ここに出てくるの？」 今度は葵がびっくりした。「浩くんに頼んだって、何を？」

浩はしばらくもじもじしていたが、もう隠してもしかたがないと思っただろうか。いくらかヤケにもなっているようだ。

「兄さん、最近ヘンなんですよ。時々なんだか考えごとをしてるし。今度も僕にあの政治家を探ってくれて言うんです。絶対ユリ…さんの居場所を知ってるはずだって。僕はてっきり葵さんを心配して、手助けするのかと思いましたけど、それでもやっぱりヘンですよね」それはやはり、ヘンだろう。浩によると、どうやらこれは道明寺にも内緒のことだった。それはますます亮一らしくない。亮一に直接聞いてみたとしても、それではうかつに動けなかった。

あれやこれやの懸念をかかえたまま、とりあえず浩には口外しないように言って帰す。しかし浩の表情ではしばらく葵とこちらに残りたかったようだ。

ユリのいるホテルに戻った時には時刻もかなり遅くなっていて、文さんの姿はとっくに見えない。だが、ユリがここにいつまで泊まるのかは分からないので、葵もぐずぐずしているわけにはいかない。フロントに自分の名前を告げて、ユリの部屋を呼び出してもらう。部屋に戻っていないことを、どこかで期待もしていたのだが、どうやらユリはあっさりと電話に出た。葵は思いきって、これから伺いたいかと、聞いてもらう。どうせ拒否されるだろうと思ったのだが、フロント係は電話にうなずくと、お部屋でお待ちしているそうです、と告げた。

こんな気の進まない仕事は初めてだった。葵はわりと切换えの早いほうで、多少の逡巡があっても、いざ行動を起せばなんとか度胸が据わるところがあったが、今回はそういうことは起きそうもなかった。虫の知らせなのだろうか。ユリという女が苦手なのだろうか。ユリがこういう女なのか、ぜんぜん分かっていないのだが、分かっていないということまでが、葵をなおさら億劫にさせる。

葵はさぞや、鬱屈した顔をしていたのだろう。葵の乗ったエレベーターに向かってきた男が一人、葵の眼の前で何を思い出したのか無表情に踵を返し、ロビーのほうに戻ってしまった。そんなことにさえ、葵はますます氣力をそがれる。

ユリの部屋をノックすると、中からどうぞ、と声がかかった。照明を柔らかく落とした部屋の窓辺で、ユリが立ったまま表のほうを眺めている。シャワーでも浴びていたのか、ユリは白いバスローブを着ていた。

「牧原の葵を寄越すとはね」

あの古狐もどういうつもりなんだか、とユリはつぶやき、そばにあった椅子にかけると、身振りで葵にも座るように促す。

葵は、手前のベッドの端に腰をおろした。ダブルのベッドは整えられたままだ。

「道明寺が動いたことを、ご存知なんですね」 ユリが煙草を一本取りだし、それを一服吹かすまで待って、葵が切り出す。

葵さん、とユリはこちらに向きなおって笑った。

「あの人たちのことなら、わたしはあなたよりずっとよく知っているのよ。あそこの毒氣のなかで育ったんですからね」

「道明寺もですが、笹院のお家でも大変心配しています」 葵はユリの挑発には乗らずに続ける。笹院では、できればユリさんに家に帰ってもらいたいのでしょうが。でも、ユリさんの気が進まないのなら、道明寺がいくらでも力になります。人間の世界こころにいたいというなら、それもなんとかしてくれるでしょう。ユリさんにふさわしい居場所を作ってくれるはずですよ。ともかくも無意味な非行はやめるべきです。そうでなくては、こちらがいくらユリさんを助けたくとも……。

「こんなことをいつまでも続けていると、ユリさん自身のタメにもなりません。そんなことはよくお分かりでしょう？」

そんなことは、よく分かっていますよ、とユリは歌うように繰り返すと、再び煙草を一本くわえる。では、どうして、と葵は問い返

すしかない。これでは手も足もでない、と自分でも思う。

「あのねえ、葵さん」 ユリは少し顔を近づけるようにして、葵の目を正面から見つめた。ユリの瞳が妖しく輝き、バスローブの胸元からほのかな赤みがのぼる。もう『見合い写真』の幼さは微塵もなかった。

「わたしは、こういうのがやめられないの。おもしろくて仕方ないのよ。道明寺の世話になんか、死んでもなりたくないわねえ。わたしはわたしで、充分やっていけるのだから。それにわたしは人間たちと遊んでいるのよ。狐に迷惑はかけてないでしょう」

いや、迷惑はかかるのだ。災厄にすらなりかねなかった。ユリもそれは分かっている。さもなくば、道明寺が乗り出してきたりはしない。

少しのあいだ部屋に沈黙が落ちた。ユリはうまそうに煙草を吸い終え、椅子から立ち上がろうとした。もう話は終わったのだ。

葵もベッドから立ち上がった。

葵さん、とその時ユリが思いついたように、言った。

「どうして葵さんは、わざわざ北方から道明寺のところに来たの。お家の人の意向かしら。それとも自分で決心したの？」

葵は質問の意味がよく分からずに、戸惑ったままユリを見つめた。ユリも葵の顔を見返す。

「ちょっと不思議に思ったのよね」 ユリは薄い笑いを浮かべながら続ける。 「こんなところで、男と悶着を起こ

したり、道明寺の使い走りで苦勞するより、むこうで暮らしていたほうがずっと平和で安泰なのになって」

悶着なんて起こしてない、と葵は内心憤ったが、ユリの真意が分からないので、うかつな返事はできない。母と一緒に越してきたのです、とだけ葵は簡単に答えたが、一瞬ユリの顔に軽侮の表情が浮かんだので、急いで付け加えてしまった。「でも、それはずいぶん前のことです」

だいたい、そんなことがユリと何の関係があるのだ。しかしユリ

は相変わらず微笑を浮かべながらも席を立った。もうそれ以上葵は関心を失ったようだ。

「結局、葵さんも狐のあいだにいたいのでしょうか。いくらごたごたや不都合があったって、仲間と一緒にいたいのだよ。ただ私が人間と遊ぶのとは違うから、影響力がそれほどないだけ」

ユリがそれきり背中を向けてしまったので、葵は別れの言葉をかけた。

「ユリさんに遊ばれる人間も気の毒です」

ユリはこちらに振り向きもしない。

「高城さんなども、もうこりごり、という気分でしょう。有望な政治家なのに、下手をすると命取りですから」

背中を向けた葵の後で、ユリの動きが止まったのが分かった。

ロビーに降りた頃には、もう人影もかなりまばらだった。隅の喫茶室はまだ開いていて、俯いてなにやら話しこんでいる二人連れがいたが、係りのウェイターは眠そうにしている。ドアを出ようとして何気なく、前方のガラス戸を見ると、俯いていた男の一人が立ち上がって、こちらに動いてくるのが映った。ユリの部屋に行く前に、葵がエレベーターで見かけた無表情な男だ。

葵は素知らぬ顔でホテルから出ると、後をつけてくる男をすぐに巻いてしまった。あの男は警察関係ではないだろうと、葵は思った。考えてみれば、ユリのやっているようなことが、あぶない筋の目を引かぬはずはない。ユリはもう、この世界ではやっていけない、と葵はその時心から思った。

『鏡子の家』の真鍮のプレートが赤紫色にぼうと灯っている。これが光っているのは、まだ客のいるサインなので、葵はそつと裏口から入る。ここからだと思間は通らないので、占いの客に出くわさずにすみ、葵の使っている部屋の廊下に直接出られる。鏡子の占いは基本的に予約制なのだそうだが、居間は客の待合室のようにも使

われていた。客が立て込んでいないときは、鏡子は占いとは別に、そこで客をお茶でもてなしたりする。そういうことも、けっこう鏡子の商売に役立つ。

葵がベッドに倒れこんで、考えをまとめていると、誰かが廊下に入ってくる気配がした。鍵穴から覗くとそれは文さんで、慣れた様子で葵の向かいの部屋に入る。その部屋を使いつけている様子だった。葵はちよつと首をかしげた。昨晩も、何の拍子にか、文さんと鏡子は特別な仲なのではないか、という考えが葵の頭にふと浮かんだのだが、別に二人にそれを匂わせる素振りがあつたわけではない。文さんは髪に白いものが混じり、鏡子は派手で若造りだ。それでも二人は妙に似合いといえないことはなかった。しかしまあ、それは葵の考えることではなかった。いずれにしろ、狐は他人の色事に干渉はしない。

居間のほうに物音がして、最後の客が帰る気配がした。だいぶ消耗した様子の和服の女だったが、いくらか元気を取り戻したらしい。鏡子が親身な調子で見送っている。客が出て行くと、鏡子はくると動き回って、居間のラグだの小物だのを奥の小部屋に移してしまい、香のかおりも一掃して、商売用のアヤシイ雰囲気を取り除いた。

葵と文さんが顔をのぞかせたときには、居間はもう元の居心地の良い部屋に戻っていた。あたしはどっちでもいいんだけどね、と鏡子は笑っている。

「そうすると、ユリはすっかり居直っているんだわねえ」

葵が経過を説明すると、鏡子はそう溜息をついた。道明寺と一緒に連れていったときには、ユリは頑としてそんな事実を認めなかったそうだ。

「そのときはこっちでも、そう細かいことまでは分かっていたなかったから、突っぱねられると、それまでだものねえ。もっとも、すぐに調べはつくと思ったんでしょうけど」

「どうせ誰かが来ることは、予想していたみたいでした。わたしのことも多少知っていたようです」

文さんが妙な顔をしたようだったが、別に何も言い出さなかったから、たんに葵の気のせいかもしれない。

「高城はほんとうに何も知らなかったみたいです」

葵は代議士の様子を思い出しながらそう言う。

「ただし、今は違います。少なくともかなり疑っています。目白の事件のせいかもしれませんし、誰かが脅迫めいたことをしたかも……」

エレベーターの男の話にも二人はさほど驚かなかった。しかしマズいことに変わりはない。

「問題は、ユリが全然平気なことです。この男たちの件を知らせたって、多分問題にもしやしないでしょう。やくざなんかが自分に何ができるものか、と。そして、それはそのとおりなんです……」

「そんなにたちの悪い娘とも思えなかったけどねえ」 鏡子が再び溜息をついた。

「一緒に道明寺に行ったときも。そりゃあ、態度は高飛車だし、生意気は生意気なんだけど、なんかそれほど腹も立たないのよねえ。どちらかと言うと、かわいそうっていうか……」

しばらくは誰も何も言わなかった。

文さんが気分を変えるように

「しかし、あの高城っていうのは、なかなかのやり手だよ。ユリが目をつけるのも無理はないやね」

文さんはかなり詳しく調べてきていた。それによると、高城は関東近郊の生まれ、家は地元の名家で父親は学者だが、祖父はその地の市長まで勤めた。高城本人は大学卒業後、中央官庁に入った典型的なエリートだったが、結局市議となって政治家に転向したのは祖父の血なのかもしれない。しかし、地盤カバンは父の代で途切れていたから、当選は本人の実力だろう。経歴もルックスも良いし物腰もスマートで、女性層にはもちろん地元でも評判は良い。国政にう

って出てから日が浅いから、まだいい役がつくわけではないが、将来はかなり囑望されていると聞く。特に環境問題には造詣が深い、のだそう。あまりイメージには合わないが。市議初当選のときにスローガンに掲げたのも地元¹の里山の再生だったとか聞く。

「まあユリも家柄はいいからねえ。かりにもパトロンにするんならこれくらい男でないと、と思ったのかもしれない」

ユリと高城はやはり『トパアズ』で知り合っている。しかし、確かに高城はユリの客だったが、そう頻繁に店に通っていたわけでもない。店の者は誰も二人の関係がどの程度のものか知らなかったそう。

「実はあたしの客にも、その店の娘²がいるのよ」と、ここで鏡子が言い出した。

実際『トパアズ』はここからもそう遠くない店なのだ。上品な店で客筋もいい。

「それで、それとなく、探りを入れてみたんだけど、誰もほとんど知らないのね。ユリは誰とも打ち解けないし、お高くとまっているから店に友人はいない。でも器量はいいし、ガツガツしていないから、別に評判は悪くないらしいの。名前は花の百合³って言った。お高いから百合御前だなんて呼んでたわねえ、その娘。それで、なんか、すごいらしいのよね……」

「すごいって、何がですか？」

「その娘に言わせれば、よ。百合御前はその気になれば、客をコロせるって。ユリの興味をひくようなことがあるとするでしょう。これはと思った客が来るとか。話の内容が気に入ったとか。普段はスマしているんだけど、そんなことがあると、ユリはなんかこう、ものすごく色っぽくなる。顔の表情が違ってくるし、肌からして上気するんだそうよ。真珠に紅がさしたよう、とかなんとか洒落たことを言った客もいたって。高城あたりも、なんかそれで目つきが変わったっていうし。ユリはだいたい気まぐれだし、客あしらいだって割りどぞんざい⁴なんだけど、そんなこんなで、人気はあるのよね」

「でも、それはすごい魅力ですよ……」 葵はホテルでのユリの姿を思い出した。

「魅力じゃないわ。妖術よ、狐の」 だめじゃない、葵までがそんなことを言っちゃあ。

三人ともしばらく黙って考えていたが、次に打つ手が思いつくでもなかった。

気分を変えるためか、葵が何となく言い出す。

「ユリの家は、笹院ですか、そんなに名家なんですか？ わたしはよくは知らないんですが――」

「まあ、葵は知らないでしょうねえ。あたしだってそう詳しくはないけど。あそこは関西が本拠地で、だいたいそっちを離れないから。道明寺ももとはそちらの出なんだけど、今のご隠居がここで勢力を伸ばしたから、もうむこうには帰らないでしょう。道明寺はもちろん昔からの名家だけど、こっちでここまで盛んにしたのはあのご隠居の手腕なのよ。なんでも以前は、ユリの家の方が格が高かったって話だから。でもご隠居はああいいう人だから、笹院とも仲良くやってるの。だからむこうから、こんなことまで頼まれちゃうんだ」

「わたしの単なる感触ですが」 葵が自信なさそうに言い出す。

「ユリが高城と付き合っているのは、打算だけでもないようでした。本気で惹かれていようでもあります。高城のほうも、ユリに相当未練がありそうですし。そこらへんをうまく使えば、ユリをなんとか抑えられるかも……」

高城の知っているのは、多分目白の件だけではないし、ユリが大変な火種であることも、今は分かっているのだろう。それでも葵には高城が、簡単にユリを切れるとは思えなかった。そして、ユリのあの態度もある。

「ユリが本気だっていうのは、あるのかもしれないな」と文さんが言い出す。

「以前に、狐のほうでもそういうことがあったと聞いた。家で反対

されたのか、互いにうまくいかなかったんだか、詳しい経緯は知らないが、死ぬか生きるかって騒ぎだったらしい。ご隠居まで出張ってなんとか収めたって話だったなあ。ユリってのは、あれで案外熱くなるたちかも」

「ああ、そういうばそんな話も……」 と鏡子

葵は眉をひそめた。

「それって、まさか亮一のことでは……」

「亮一って、ご隠居のところのあの亮さんかい？ さあてね、そんな話は聞いてないが。あれ、なにかい葵ちゃん、ああいう堅っ苦しいのが趣味なのかい？」

文さん、余計なことはいいいから、と鏡子が話を戻す。

「かりにユリが本気だとしてもよ」 鏡子はこのさい誰もが思う疑問を口にした。

「ユリは高城との間がマズくなるのも承知でああいう行状を続けるんでしようが。それとも知られることはないと思っていたのかしら」

「知られないと思ったのかもしれませんが」 葵の口調はますます自信がない。「それとも、分けて考えているのかも……」

「分けて考えるってー」 鏡子は困惑したようにつぶやく。こんなことは、ユリ以外の誰にも説明のつけようがない。

「でも、それじゃあ、高城でユリを抑えるっていうのも無理じゃないの」

文さんも珍しく苦い顔だ。

「しかしお鏡さん、それ以外に突破口がないよ」

道明寺の言っていた“最悪の場合”の話を二人は知っているのだろうか。道明寺はそれをどの程度本気で口にしたのか。葵はそれにも、あまり樂觀的ではなかった。

そのとき、玄関ドアにノックの音が聞こえ、三人とも同時に飛び上がった。こんな時間に占いの客など論外だろう。鏡子は眉をひそめてドアに向かったが、こちら側の覗き穴から覗くとすぐに玄関を

開けた。

ドアにむこうに浩が立っていた。三人の視線に一瞬すくんだようだったが、すぐに低い声で用件を告げた。葵さん、すぐにお家^{うち}に帰ってください。勢以さんが倒れました。浩の声が、遠いところからのように響いた。いま道明寺のものがついていますが、ずっと葵さんと呼んでいます。

空中武闘会

道明寺もそんなに大げさに騒ぐことはないんだ、というのが、葵が駆けつけたときの、勢以の第一声だった。もっとも、薄目を開けてそれだけ言うと、またも勢以はこんこんと寝入ってしまった。

本当に目を覚ましたのは、正午近くになってからで、自分のベッドの脇につっぷしている葵を、重いね、と邪険な声で起こした。

「お母さん、わたしが出かけるときからこんなに具合が悪かったの？」

「もう二三日前から悪かったようですよ。きっと葵さんの仕事に差し支えると思って我慢してらしたんでしょう。もっともお医者様のお話だと、薬さえちゃんと飲んでいれば、もう心配はないそうですから」

勢以がむこうを向いたまま答えないので、そばに立っていた正子という女が代わった。正子は道明寺のほうでよこした女だ。最初は男の狐が手伝いに来ていたらしいが、勢以は自分一人でやっていけると、すぐに追いついてしまったそう。しかし、だいぶ具合が悪そうだという報告を受けた道明寺が、どうしても女手だけはと譲らずに正子をよこした。勢以はこれもイヤだったらしいが、その時はもう拒否する力もなかったのだろう。一晩中氷嚢を取り替えたり汗を拭いたりする葵をそばにおいて、勢以は安らかな顔で眠った。正子はいつもそばにいたが、勢以の世話はまかせっきりだ。これまでにほとんど手を焼いたのだろう。

次の日も、夕方近くになると、もう勢以は車椅子を出させ、それで外に出たがった。

牧原の家の近くには特別な場所があつて、勢以のお気に入りその場所は、季節によっては数種の花が開く。

「でも、その身体ではいくらなんでも無理よ、それに時間ももう遅いし」

花だって咲いているかどうかも分からなかった。葵も正子も当然反対したが、勢以がみるみる癪を募らせるので、けっきょく言われた通りにするしかなかった。

もっとも勢以の回復力は強い。

車椅子を押してなだらかな小道をたどっていくと、置き忘れられたような小さな草地に出る。先ほどから時間が止まってしまったような夕暮れがいつまでも続いているので、あまり気温も低下していない。それでも葵は母の肩を柔らかいケープでくるんだ。勢以はおとなしく葵に世話をさせながら、黙って車椅子から草地を見渡している。

ところどころにオレンジ色の花が自生し、微風をうけて時にそよいだ。白や青の小花もあったが、いずれも数は多くはなくて、葵たちのいるところからは、薄緑色の野草が広がる。

「あれはニッコウキスゲというのよ」突然勢以がそのオレンジの花をさして言ったが、葵はひそかに首をかしげた。ニッコウキスゲが今頃の季節、こんなところに咲くものかどうか。なんだか葵の知っているニッコウキスゲともどこことなく違うように思える。

「あたしは年をとりすぎたのかもしれない」

勢以はまた突然そう言った。お母さん、と叫ぶ葵をさえぎり、勢以はそのまます言葉を続ける。

「狐の親子は普通は長い年月を一緒に生きる。そうやって自分の知恵や生命力を伝え、その子の力を育てるんだね。だけどあたしは葵を生むのが遅かったから、あんたに充分にそういうことをしてやれ

ない。あんたのことを考えても老いの焦りが先に立ってしまう。あんたもさぞかし厄介な母親を持ったと常々思っているだろうけど、あたし自身にもどうしようもないんだ。葵、これも因縁だと思うんだね。それにあんたももうこの辺で、そろそろあたしから解放されてもいいのかもしれない……」

勢以は間をおいて、あたりの様子をもう一度眺めた。そして今度はいくらか口調が変わった。

「道明寺は葵のことを買っているようだ」 勢以の口元に微かな笑みが浮かんだ。喜んでいるのか皮肉なのか、よく分からない。「だから葵もそのつもりでいなさい。これからはむこうがあんたの生きる世界だ。あたしがこんなになってしまったからね。葵がひとりですべていければと、ずっと思っていたけれど、あたしがもう助けにならないとしたら、それはラクなことじゃないからね」

葵には言い返す気力もない。病後の衰弱があるにしても、母親がこんな調子で話すのは初めてのことだった。こんなふうに外に連れ出してしまった自分が悪い、と葵は思った。勢以は気が済んだのか、もう家に帰ってもいいと言ったが、葵は車椅子を押すだけの力を出すのもやっとだった。

正子は心配そうに戸口まで迎えにでていたが、葵の顔色を見ると、急いでそばに駆け寄ってきた。正子に介添えされながらベッドに横たわった勢以は、悄然としている葵に、そのまま顔も向けずに言った。あんたはもう道明寺の仕事に戻ったほうがいい。あたしはしばらくこの人の世話になるから心配はいらない。あんたに余計な気を使わせるかと思うと、かえって具合が悪くなるようだ。

「なかなかいい部屋だと思うけど」 葵は一応部屋を見てまわってから、亮一とリビングに戻り簡単にそう言った。ここに長居するわけではないのだし、清潔で便利でありさえすれば、葵はどこでもそう不満はない。

一応の報告をしておくつもりで寄ってみたが、道明寺は屋敷を留守にしていた。なんでも関西のほうに急用ができたのだという。亮一は勢以の話を聞いて苦い顔をしていたが、別になにができるわけでもない。すでに老人のほうから指示が出ていて、葵は鏡子の家から一旦引き上げるようになった。あちらこちらに道明寺の使っている住まいがあるが、そのうちの手頃な部屋がちょうど空いたのだという。都内の静かな住宅地で、鏡子の家とも行き来がしやすい。感じはいいが、特になんということもないマンションの一室で、リビングと小さなキッチンと、寝室がひとつというシンプルな間取り。ほんとうに手頃な住まいだったが、それで道明寺はどういうつもりなのか。今回の葵の仕事が長引くことを予想しているのか、それともここが葵の当面の居場所になるのか。それにしても、ユリの件に限れば、そうぐずぐずしていい話ではない。

亮一は葵に合うような服を何着か買ってきていて、それをクロージェットにかけた。

前の住人の服も多少残っているから、葵が気にならないならそれも着ていい。もっと欲しいなら自分で買え、と。

食器やらなにやら日常の必需品はだいたい揃っていて、住人が入れ替わってもすぐに生活ができる。亮一自身もそのうちの一軒を使っているのだが、彼の場合は道明寺に泊まりこんでいることのほうが多い。

葵にユリの件の経過を聞かされても、亮一は別になにも付け加えなかった。しかし、葵が仕事を続ける気であることが気に入っていないのは確かだった。無理をしないで降りてしまえ、というのが亮一の基本的な意見のようだ。確かに次の手はいまだに見つからないでいるのだが。

葵は葵で気になることがある。

「亮一はどうして、自分でユリのことを探ろうと思ったわけ？ 何かわかってることがあるんじゃないの？」

「別にそういうわけじゃない。葵のことが心配だったただけだ」

葵は思わず身体を引いて疑わしげに亮一を見つめた。亮一は彼女と目を合わさずに、テーブルのグラスに手を伸ばした。亮一もその気になれば、平然と嘘がつける。

「まあ、それはいいけどね」

葵は、勢以とのことがあったせいか自分の気持ちを持て余していた。勢以は娘を見捨てたのだろうか。葵にこの先道明寺の眷属になれというのか。もっとも今だって傍から見ればそんなようなものだ。しかし葵は自分の気持ちとして、そういう立場は厭だと思った。亮一にはそういう葵の逡巡は分らないだろうし、それを分からせることも葵にはできない。それに、葵は淋しかった。気を紛らわせる鏡子たちもない。引越しはタイミングがよくなかったのだ。亮一にこのままそばにいて欲しかったが、彼が何を考えているのかは、いつもの通り葵にはよく分らない。

亮一は時計を見ると、葵の肩にまわしていた腕を解いて、ソファから立ち上がった。やり残したことがあるので、これから道明寺のほうに戻るといふ。葵も一緒に立ち上がった。亮一には葵のそばに長くいたいという気持ちは全然ないのだ。

マンションのエントランスを出るところまで、葵は未練がましく亮一についていった。外はもう真夜中で、人は誰も歩いていない。車でさえこの先のいくらか広い道を時折横切って行くくらいだった。エントランスの灯だけが細くともっているのが、かえって荒涼とした気配を与えた。人間の世界はこんな寂しいところだったろうか。素っ気なく自分から離れていく亮一に、怒りに似た感情が募ってきて、葵は歩きながらも自分がだんだんと手に負えなくなってくる。道路の脇に置かれた自販機の照明が何の具合か一瞬消えて、あたりが一時真っ暗になった。その拍子に葵のなかで何かが決壊したようだった。葵は道路を渡りかけている亮一に追いついて、訳も分からずに、その胸を叩いた。亮一が葵をそのまま抱き取って、二人ともつれるようにエントランスのガラスに寄りかかった。

オレンジ色の光が葵の脳裏に閃いたのと、横丁から車が視界に飛

び込んで来たこと、亮一に引っ張られて葵の身体が横に倒れたのが、ほぼ同時だった。ガラス扉が大音響をあげて碎けた。散乱する破片を避けるように彼女の身体を抱くと、亮一はそのまま葵を引っ張って、全速力で走り出した。葵もものも言わずに、それに従う。

マンションからだいぶ離れたところまで来て、かなりの距離を歩いてサイレンが聞こえた。野次馬もだいぶ集まっているのだろう。ここへきて恐怖がはじめて葵を襲った。気がつくとな亮一の腕に痺れるほど硬くすがりついていたのだが、筋肉が硬直して、しばらくは自分でそれを緩めることもできない。

「今の、あの男は……眼がおかしくて……」 葵は、亮一の顔を見て口をつぐんだ。

亮一は今まで彼女が見たこともない表情をしていた。困惑と、怒りと恐怖とが入り混じったような顔だ。

あの車を運転していた男は確かに普通ではない。そして男の焦点の定まらぬ眼に確かにユリの意志を感じたのは、葵の錯覚なのかもしれないなかった。しかし今の一件にユリが関与していないとは葵にはどうしても信じることができない。

怖い目にあうと優しくしてもらえる。

葵はそれから亮一のマンションに連れて行ってもらい、甘くて暖かくアルコールの入った飲み物を飲ませてもらって、亮一の腕のなかで朝まで眠った。もともと二人が寝入ったのは明け方近くになってからで、亮一は葵の髪をかきあげて、葵はほんとうにケダモノだな、とあきれた。

しかし亮一だってケダモノなのだ。

昼近くになった光が窓から差し込んできて、葵はやっと眼が覚めた。

さっきから亮一が耳をくすぐっていると、葵は半ば寝ぼけながら思っていたが、頭がはつきりしてくるとそれは葵の脱ぎ散らかした

服が耳に被さっていたのだった。

テーブルの上にメモがのっている。亮一は道明寺のところに戻ったらしい。

この部屋は葵が自由に使ってもいい。しばらくは鏡子の家にも立ち寄るな。あまり外にも出ないほうがいい。そして一晩中亮一は葵に注意を与えていた。くれぐれもユリを甘くみるな、と。

最初の恐怖心がおさまり、亮一に甘やかされて満足してしまうと、ユリが自分に危害を加えるというのも、なんだか筋の通らない話に思えてくる。どうしてユリがそこまで葵に怒り、あるいは憎しみを募らせなければならぬのか。現に鏡子たちは今までに何の被害も受けていない。鏡子だってこんな事態は考えてもいないだろう。葵はホテルでの最後のユリの動揺を思い出したが、あれが引き金になったのだろうか。しかし、一方で、葵は最初の瞬間の自分の勘を信じていたし、なにより亮一が、言葉には一度も出さなかったが、ユリの関与を疑っていないではないか。

葵はのんびりと風呂に入り、冷蔵庫にあったあり合わせの材料で食事を取った。この部屋は昨日のマンションに比べるとかなり広かったが、殺風景なほど飾り気がない。しかし片付いているとはいえ、紛れもなく亮一の生活の痕跡があって、葵にとっては自分の巣穴のように安心できる。テレビもつけて昨夜の事件が流れていないかを見る。こまめにチャンネルを変えてやっとローカル局のローカルニュースに、飲酒による暴走運転としてそれらしい映像が出た。とはいえ、葵の見たこともない運転手の名前が分かったところでどうなるものでもない。

葵の勘が正しいとして、ユリが無関係な人間を操れるほどの力を持っていることは、予想外のことだった。狐はヒトからは妖力とは思えないような力をいろいろと持ってはいるが、普通は他人の意志まで操ることはできない。せいぜい葵のように、一時的に外見を

変えるとか、感覚や身体能力を高める、といった程度だ。しかし、古い血筋の狐のなかには、それ以上の力を持つものもいる。勢以も、本人から直接聞いたわけではないが、かつてはそういう力を使った。道明寺だって使えるのかもしれない。そういう力はとうに絶えたという話も聞いたし、家筋にかかわらず新しい世代の狐には伝わらないのだと、聞いたこともある。そういう力が本当はどういうものなのか、はっきりしたことは分からないのだ。葵も今までは伝説のようなものだと思っていたし、亮一にしたところで、詳しいことまでは知らないだろう。しかし道明寺や笹院のような古い家柄なら、そういう力が残っていてもおかしくはない。ユリは確かに名門の出なのだ。

疲れが充分とれてしまうと、葵はだんだん落ち着かなくなった。ユリはとくにホテルを引き払っているだろうが、文さんならば、行方を突き止めているかもしれない。しかし、鏡子に連絡をとるのはさすがにためらわれた。ユリの意図が分からない以上、へたをすると、葵の災難に二人を巻き込むことになる。

葵はしばらく窓から様子を窺った。今のところ怪しい空気は感じられない。亮一はここに来る途中でも、過剰なほど追っ手の気配に気を配っていた。そしてそんな警戒心は明らかに人間に必要なレベルのものではなかった。

結局葵は外出することにした。閉じこもってビクビクしていてもしかたがないのだ。

用心を重ねながら表に出て、昨夜のマンションに向かった。どうするというアテがあるわけではなかったが、現場を見てなにか分かることがあるかもしれない。

あたりは静寂を取り戻していた。割られたガラス片はとくに片付けられていたが、扉のガラスは全部はずされていた。このマンションはエントランスが前方に大きく張り出している造りなので、車にぶつけられても建物そのものにはあまり損傷がない。しかしそれでも、外構の一部などにはひどく抉られたような痕があった。床の

一部にも掘り返されたような傷痕がある。

吹きさらしの扉の壁に張り紙がしてあって、昨夜の事故の説明と扉の修理予定などが簡単に記載されていた。葵はそれらに注意深く目を通しながら、昨日の部屋に上っていった。

部屋の外にも内部にも格別異常は認められない。

昨夜亮一を送ったときのままのリビングを通り、葵は部屋をひとつずつ見てまわる。

全部に変わりがないことを確認してしまうと、もうそれ以上はすることがない。結局なんのために出てきたのかと思ったが、そこで葵は亮一の買ってくれた服を思い出した。ついでだから、少し持ち帰ることにしよう。

ここのクローゼットは横に折畳めるタイプの引き戸で、扉を開けると、それがきちんと閉まっていけないには気がついたのだが、開けるまでは特に何とも思っていなかった。

葵は息を吞んで、思わずその場に立ちすくんだ。

クローゼットの中が、滅茶苦茶に荒らされていた。衣類がここに散乱している。亮一がそこに吊るした服はすべてナイフで切り裂かれ、眼も当てられない状態だった。何度も何度も切り裂かれているものもあった。葵の目の前には光沢のあるワインカラーのドレスが、細紐のようになってぶら下がっていた。その裏地が引き戸からの風を受けてかすかに揺れた。この服は特に念入りに切り裂かれている。あの運転手がこの部屋まで上ってきたとは考えられない。これは明らかにユリ本人の仕業だった。

頭の片隅にもやもやと巣くっていた疑念が、衝撃ではつきりとその正体を現し、葵はそれに打ちのめされた。なぜユリがあの時あの場で暴走したのか。葵のことを知っていたのか。なぜ亮一はユリが葵に牙を剥くのを、さほど意外に思わないのか。

亮一はユリと関係がある。

だから、亮一はこの成り行きに責任を感じているのだ。

葵はしばらくその場にくず折れたまま、動くことができないでい

た。頭の中に白いバスローブを着たユリの姿がちらつき、なかなか追いつくことができない。その妖艶さに葵の胸は潰れた。

これからどうするのかを考え始めたのは、かなり時間がたってからのことだ。いや、実際の時間はそんなにたっていないのかもしれない。まず、あまり働かない頭は、ユリをなんとかしなくては、と機械仕掛けのように思った。こうなったからには、ユリはますます危険だった。そして、それは葵の本来の仕事でもある。

しかし、こうなると鏡子たちと接触するのは、ますますいいことかもしれない。現に亮一もそれを注意していた。かといって、鏡子のところに戻れないなら、葵はこれからどう行動すればいいのか。

葵は不意に笑い出しそうになった。眼から涙が溢れてくる。少し前までは、葵には帰れるところがいくらでもあった。亮一の部屋があったし、鏡子の家に行けた。いざとなれば牧原の家まで戻ってもよかった。いまや、勢いには拒絶されているし、鏡子たちとは連絡をとるのも難しくなり、亮一の元にはもはや戻ることはできない。

葵にはとうてい自分の推測を亮一に問いただす勇気がなかった。

亮一が否定しても、それを信じられるかどうか分からなかったし、もしも否定しないのなら、自分がその打撃に耐えられるかどうかも分からなかったのだ。

どのくらい、そうした感情の渦巻きに捕らわれていたのだろう。

窓の外から話し声が聞こえたような気がした。そっと覗いてみると、マンシヨンの住人らしい何人かが、割れた扉の前でおしゃべりをしている。昨晚の事故のことでも取りざたしているのだろうか。日常的な光景だった。ひどい事故とはいえ人身の被害はなかったのだから、わりとノンキなのかもしれない。

そして葵はあつけなく、簡単な方法を思いついた。

葵は窓を大きく開け、気がついてこちらを見上げた人たちに軽く頭を下げて挨拶した。それから再びビングに戻り、そのベランダも大きく開けた。ベランダに出てまわりを見渡す。ここら辺はマ

ンションだらけで、眼に入るものも、あいだを走る道をのぞけば、よそのマンションのドアやベランダばかりだ。

充分にベランダから自分の姿をさらしてしまうと、葵は悠々と帰り支度を始めた。文さんにも誰にも頼む必要はないのだ。ユリが自分を狙っている以上、むこうのほうから出向いてくれる。

葵がエントランスに出ると、ちょうど集まっていた人たちに出くわした。何人かが好奇の眼差しで葵を見やる。葵はその人たちに混じって少しおしゃべりをした。怖かったですnee、真夜中に大きな音がして何事かと思いました。ほんとだよ、あれだけ飲酒運転が言われてるのにさ。だいたいガラスだけですんで、まだよかったのよ。建物に正面からつつこんでいたら、本人だって命がないよ。

ひとしきりここで時間を稼いでから、葵は最寄の駅に向かった。頭をせわしく働かせたが、結局、高城事務所の近辺にするしかなかった。わざとタクシーは使わずに、私鉄と地下鉄を乗り継いでいく。そのほうが安全だし、たぶん時間もかけられるだろう。電車の中でさえ葵は注意を怠らなかったが、特にあやしい気配はみえない。

高城事務所は地下鉄の二つの駅のどちらからも距離があって、これは葵に好都合だった。靖国通りに出てみると、あたりは車が走り回るばかりで、歩行者の姿がほとんど見えない。葵は事務所のビルから少し離れた小さな公園のような場所に向かった。ここは最初に来たときから気になっていたが、ユリをおびき出すのには、この近辺ではこの場所しかない。

葵はあたりを窺うと、さりげなく人目につかない一角に入り込み、その柵を乗り越えて中に入った。立ち入り禁止の看板が出ている。都心とは思えないほど樹木が茂っているのだが、ここは公園などではなく、もともと国の所有地で、確か議員宿舎の建設予定地だったところだ。それが市民運動だか環境団体だかの反対にあい、事業が一時凍結された。二、三年前にはかなりニュースにもなったのだが、その後どうなったのかは誰も知らない。こうして今も残っていると見ると、事業は凍結されたままなのだろう。

そこからはこんもりと茂って見えた木立も、入って見るとそう広くもなかった。外側に並んだ樹木の隙間から周りの道路が見透かせたし、そこを走ってゆく車も見える。

葵は手頃な立地を探してあたりを見回す。ユリの持っている力を自分はほとんど理解していない。葵がユリより有利なのは葵が一人ではないということだけだ。葵の後ろには道明寺がおり、おそらく狐の一族がいる。ユリの家族すらそこにいるのだ。葵一人を粉砕しても、ユリは窮地を逃れるどころか、ますます自分の首を絞めるだけだ。

少し風が吹いてくるのが分かった。狐があたりにやってきたのだ。明るい道路を透かしていた木々の隙間が見る間に狭まり、あたりがどんどん暗くなってゆく。葵はあたりで一番高い木の近く、雑草の比較的少ない地面を足場に定めた。

葵のいる所から少し離れて、空気がいくらか明るくなった。百合の花が何本か、老木の木陰に清楚に開いた。花のあいだから湧きでるように、ユリが姿をあらわす。

「ユリさん、凝った演出ですね」　まずは葵が声をかける。「他人のクローゼットに狼藉を働く人とも思えません。あれって血の道ですか、もしかして」

ユリはおおように笑ったが、葵を生意気だと思ったのは確かだ。

「あんまりセンスが悪いから。亮一も、どういうつもりであんな服を選んだのか。相手があなたでは仕方もないのかしら。昔は趣味が良かったのに」

「こちらの事情をよくご存知ですね」　葵は少しずつ後ずさりをしながら、動ける空間を確かめる。

「葵さん、あなた私と勝負する気なの？」　ユリが葵の動きを目ざとく見つけて、そう問う。今度ははっきりと声に嘲りの色がある。

「そういうわけではありませんが」　葵はあくまで慎重だった。「ユリさんがどう出てくるか分かりませんから」

わたしと勝負したって勝ち目はないのよ。ユリの眼差しがそう言

っている。そして葵もそう思うのだ。

「でもユリさんの相手は私だけではありません。道明寺を甘く見ないほうがいいですよ。あまり言いたくありませんが、あの人たちにかかったら、ユリさんの命だって保証の限りではないですから」

それにユリさんの行動には笹院の家も迷惑してます。いずれ黙ってはいないはずですよ。

葵は思い切ってそう付け加えた。

ユリは最後の言葉にだけかろうじていくらか反応したが、あとは冷たくせせら笑った。あら、あぶないのはあなたや道明寺も同じことよ、とユリはさらりと言ったのける。

「あたしが狐やその秘密をこっちの世界でおおっぴらにしたら、いったいどうなることでしょうね」

葵は一方でユリとの間合いを計りながら、その言葉も考えてみた。一般の人間にしてみれば、狐の世界など御伽噺でしかない。万一誰かがどこかであばきたても、まともに取り上げられるようなことではないのだ。それに道明寺はもちろん普通の狐たちも、不測の事態に備えての辻褄合わせは怠っていない。常に巧妙に工夫がしてある。しかし、そういうことはユリだって先刻承知のはずだった。そして実際には、いくら面白半分の噂でもたてば、それだけでも一時的に個々の狐は相当動きにくくなる。現にユリが咎められている理由のひとつもそれだ。ユリが具体的にどういう手段を考えているのか明らかでない以上、その言動は依然不穏だ。

「おそらく、どうにもならないでしょう」 視界の周りに白いものが飛び散る。花の香りが気になってくる。

「信じる人間もいないでしょうし、狐のほうも皆それなりにうまくやります。でもどうしてもそうまでして、仲間を裏切りたいんですか？」

ユリが低いけれども楽しげな笑い声をたてた。葵がほんの少し木のほうに退く。

いつの間にか木々の後から何本もの百合の花が咲き出していた。

それはユリのまわりにも咲き、葵のほうにも進出している。濃厚な白い花が鎌首を持ち上げるたびに、何人ものユリに囲まれる気がする。

「あなたみたいな狐の猫っかぶりには分からないことだわねえ。そんなに優等生でいて、何がいったいおもしろいんだよ。あんなどうしようもない母親にまでマメにつかえているみたいだし……。葵さんは知ってるのかしら？ ああ勢以さんというのは随分評判の悪い狐だったそうねえ。それがすっかり年をとったんで、北方から来た世間知らずの若い狐をたぶらかして一緒になったって聞いてるわ。そうやって生まれたのが葵さんだって」

「そんな…… ひとの家庭のことまで――」

「あたしね、そういうのって、よく分かるのよ」 ユリは心から楽しそうに言った。「あなたの気持ちの表も裏もね。どうせあなたも表しか見ないでしょうけど。物事にはね、あなたの見たくない裏もあるの。そんなことも知らないで、一生懸命いい子でいる、あなたみたいな人っておかしくって――」

あたしは、あなたのような仲間が大嫌いなよねえ、とユリが叫ぶと同時に葵は木の上に飛びあがった。白い花が見る間にまわりの空間と足元を埋め、ユリの姿が溶け込んでしまう。葵がめざした枝を捕まえる前に、脚が何かに引っ張られてしまった。かろうじて葵は手前の枝につかまる。ユリの姿はどこにも見えない。

葵は頭の上をそっと見上げた。木々は密林のようにそびえ、頭上の青空がわずかに見える。この空間には結界が張られた。しかしこの結界はユリだけが作ったものともいえない。

どこからかユリの声が聞こえる。近くでいながら木霊のように響く。

「他人の命を心配するより、自分の心配を先にしたら。あたしがその気になれば、あなたの身体なんかあのぼろきれのように、ずたずたにできるのよ」

正面の木の枝が目の前で折れ、尖った先端が葵目にかけて襲いかか

った。

「血迷わないでくださいね、ユリさん」 枝は葵が楯にした大木の幹に突き刺さった。それをどうにかかわして葵は声と違う方角を探った。「私をどうにかしたからって、亮一さんは帰ってきませんよ」 ユリのせせら笑う声が聞こえた。

「あんな男は、熨斗^{のし}をつけてあなたにあげるわ。亮一にもう少し気骨があったなら、私と楽しく暮らせたでしょうに。私に置き去りにされたんで、今頃後悔しているでしょうね。そういう顔をしているわ。つまらない女しか残ってないって」

「それで高城さんですか？ それも今ではどうでしょうか。私の感触では彼もだいぶ逃げ腰でしたけど」

続けざまに四方の木から枝が飛んで来た。そのうちの一本が袖をかすめ、布地の上に血が滲んでくる。感触が木というよりも金属に近い。葵は今度は下に飛んで、凶悪に揺れる百合の群れの、かろうじて少し上の枝でとどまる。

「ユリさん、少し休戦にしませんか。わたし荒事は苦手なんです。もっとよく話し合って……、ユリさんの側の言い分もあるでしょうし」

もう一度上にあがるとみせて、葵はすばやく裏側に回った。

葵の声が樹の上側から響いている。そこに枝が集中的に突き刺さると同時に、ユリの勝ち誇った声が聞こえた。

「どうして形勢不利な人と休戦しなくちゃならないの。わたしは――」

ユリの言葉が途切れると、かわりに鋭い悲鳴があがった。葵が動かしした枝が古木の右側に唸りをあげて突っ込んだのだ。思った通りユリは葵の姿を見ていなかった。獣めいた呻きが一瞬古木の陰から聞こえたと思った。百合の花が一斉に嵐にあったように乱れる。乳白色の花弁が次々に赤く染まり、最後には汚れた褐色になった。それが濃厚な、ほとんど腐臭に近い匂いを放って、葵はそれに噎^むせそうになる。少しのあいだ、多分葵の感じたよりもずっと短い時間だ

ろうが、葵は息を止めていたが、やがてすべてに静寂が戻った。それきりユリの気配が途絶えた。

木々が元の高さに戻ってゆく。まわりがだんだん明るくなって、古木の根元に枯れたもの以外、そこにすでに花の姿はない。

葵は大きく息をつき、瞳を細めてあたりを見回した。なんだか瞳孔が開いてしまったようだ。樹木の背後に明るさが戻り、車の音もかすかに聞こえる。なるべくしゃんと歩こうとするのだが、ともすると脚がもつれそうになった。

緑地の柵を再び越える。車が何台もそばを通り過ぎてゆくと、その排気ガスの臭いがあらためて鼻についた。この臭いに、こんなに安堵を感じるなんてどうかしている。

そこに思いがけなく、文さんの姿があった。

葵はよろよろと彼のそばに近寄っていった。

「どうしたんですか、文さん。そんな真っ青な顔をして」

「葵さん、それはこっちの科白だよ」 文さんの顔がくしゃくしゃになった。

「あんたの顔のほうがよく青い。それに、なんだか泥だらけじゃないか」

文さんに支えられるようにしてタクシーに乗ると、車はそのまま鏡子の家に向かった。葵はユリの危険性を手短に話し、懸念を表明したのだが、文さんは全然気にしていない。葵は自分の説明が悪いと思った。舌がもつれてうまく喋れないのだ。

鏡子は何も聞かないで葵の傷の手当をしてくれ、そのまま寝室に連れていってくれた。身体中の節々が痛い。切り傷も思ったよりあちらこちらに出来ていて、葵が切れ切れに憶えているよりずっと立ち回りは激しかったのだろう。

「しかし驚いたわねえ。葵にもそんな力があったとは」

後で文さんと一緒に話を聞かされた鏡子が、最初に驚嘆したのは

その点だった。

「本物の能力かどうか分かりません。多分違うんでしょうね。二度と使える気がしないから」

ベッドに身体を起こしたまま、鏡子の入れてくれた甘過ぎるリキユールを飲みながら葵は考えていた。ユリと同じような攻撃が使えたのは、ユリにとっても予想外だったろうが、葵にも実は訳が分からないのだ。身に危険が迫ったときの咄嗟の反射行動というしかなかった。

「いや、それだけでもないかもしれない」 さっきから考え込んでいた文さんが、口をはさむ。

「あの、公園かい？ あそこの結界はただ事じゃなかった。ユリ一人の力であれだけのものを作れるようには思えないんだがね」

文さんはユリをずっと見張っていたのだ。だからユリが車で葵たちを襲ったのも、マンションに入っていたのも、ちゃんと目撃していたのだが、葵たちはどこかへ逃げてしまったし、この際ユリからは眼を離さないほうがいいと判断したのだ。

「だからあの公園にも入るつもりだった。葵さんが来ているとは知らなかったけど、誰かと会うつもりだろうとは思ったからね。だけど、入れないんだねえ、これが」

文さんによれば二人がなかにいた時間はさほど長くなかったらしい。文さんがまわりでうろうろしているうちに、真っ青な顔のユリが出てきた。足取りには特に異常はないようだったが、深手を負っているのは分かった。文さんはおおいに迷ったが、中で何が起きたかのほうが気になる。そうしたら葵が出てきたのだ。

「だけど葵も無茶だよ。一人でユリをおびきだすなんて」

鏡子は自分がいざというときに頼られなかったのが不満だったらしい。葵は亮一をめぐる確執など話す気にもなれないが、しかし葵が何も言わなくても、文さんの話も聞いていることだし、鏡子はある程度察しているかもしれない。

葵がこの家にいる危険性についても、鏡子は全然問題にしていな

かった。

「あんまり知ってるものはないけど、ここは道明寺の直轄だからね。ユリなんかには手が出せないの。だから葵はゆっくりここに居ていいし、いつでもここに帰ってきていいの」

二人が部屋から出て行くときに、文さんが思い出したように言っていた。ああそうだ、亮一君にも知らせとかなきゃあ。彼もさぞや心配しているだろう。

葵はこちらを振り返った鏡子の目を見た。鏡子が葵のそばに近づく。葵は鏡子のほうに身体を傾けてささやいた。

「亮一さんとは会いたくありません。鏡子さん、彼が何か言ってきたもー何も言ってきたかもしれないけどーわたしに何も知らせないで」

鏡子はちょっと葵の顔を見たが、何も言わずにうなずいて、文さんと一緒に部屋を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5301z/>

狐物語

2011年12月17日22時43分発行